

特集

呼吸器救急診療 ブラッシュアップ —自信をもって対応できる—

救急診療では、呼吸器疾患に限らず、致死的重症患者や一瞬の判断の誤りが生命に関わる重大な疾患にも自信をもって対応できることが求められる。救急患者の重症度は多岐にわたり、同一疾患であってもその重症度は患者によって違う。また、同一患者であっても、重症度も病態も時々刻々と変化する。救急診療にあたっては、まずは①視診（第一印象を含めた患者の外観）、問診（病歴聴取）、触診、打診、聴診による患者全体の印象・所見からの評価、②バイタルサインをはじめとした客観的な患者情報に基づく評価から鑑別診断を想起し、遅延なく必要な検査をするとともに、初期対応を行いながら、総合的に可能性の高い診断、治療および管理を行う。こうしたプロセスは、すべての診療の基本であり、救急診療は医師としての臨床能力を最大限に発揮できる場である。

本特集では、Ⅰ．総論、Ⅱ．呼吸器徴候からみた救急診療、Ⅲ．基本となる対応法、Ⅳ．知っておきたい検査、Ⅴ．主な疾患からみた救急マネジメントに分けて、いずれも臨床経験豊富なエキスパートの先生方に執筆をお願いした。

「Ⅰ．総論」においては、救急患者の初期対応でのアプローチを示した。「Ⅱ．呼吸器徴候からみた救急診療」では、それぞれの呼吸器徴候を主訴とする急病患者への対応についてお示しいただいた。「Ⅲ．基本となる対応法」では、呼吸器救急診療で大切な対応法について概説いただいた。「Ⅳ．知っておきたい検査」では、最近注目されている緊急内視鏡と救急超音波診／肺エコーについて解説いただいた。呼吸器画像診断については、本誌第 65 巻（2017 年）第 1 号に詳しいのでご参照いただきたい。「Ⅴ．主な疾患からみた救急マネジメント」では、救急診療で遭遇する可能性が高い 10 疾患・病態について、典型例の提示とともに、概説いただいた。

本特集により呼吸器科医を目指す若手（研修医・専攻医）から実績あるエキスパート呼吸器科医まですべての先生方が自信をもって呼吸器救急診療に対応できるものと確信している。

藤沢市民病院 副院長 西川正憲